



今、改めて「つながり」の大切さを

第51回全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会
全国大会 北海道大会
第55回北海道言語障害児教育研究大会 千歳大会
副大会長 森實 啓之
(北海道言語障害児教育研究協議会会長)
(札幌市立前田小学校長)

第51回全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会全国大会並びに第55回北海道言語障害児教育研究大会が、四季の移ろいを感じることができる北海道で空に一番近いまち、千歳市において開催されますことを心よりお喜び申し上げます。都道府県を越えて各地から言語障害教育に携わるたくさんの皆様にご参加をいただくことによって、新たな「つながり」が生まれ、広く深い学びを得て、自らを高めることができる大変意義深い機会といえます。

コロナ禍での制約がある日々が続く、人と人との接触やコミュニケーションの在り方の変化が求められる今、改めて「つながり」の大切さを痛感しています。思い描いたことがなかなかできずに不安を抱えながらも、子どもたちの成長のために献身的に働く言語障害教育に携わる皆様に、本当に頭が下がる思いです。

今大会の研究主題「ことばを支える『心の育ち』を大切にしたい支援のあり方を考える」のもと、四つの研究の柱に沿ってこれまでの実践を重ねてきました。子どもを多面的な視点から総合的に理解し、子どもと保護者に寄り添った支援をするために子ども・保護者と連携しながら支援を実践して、その実践を振り返り関係者と情報を共有することを大切にしてきました。これは、子どもがその子らしく自信をもって生活し、学んでいくことができるようにするために、子どもを取り巻く周囲の人たち、保護者、学級担任、担当者などが連携していくことの大切さ、それぞれの立場から子どもへの支援を行うことの大切さであり、人と人との「つながり」が求められていると言えます。

今大会が、実践研究・実践交流の場として、事例研究発表を基に、コーディネーターの皆様の お力添えをいただき、一人でも多くの子どもたちへの支援に、今後の教育実践に役立つ研修の機会になることをご期待申し上げます。

結びになりますが、大会の開催にあたり、全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会、北海道言語障害児教育研究協議会石狩ブロックの皆様、運営委員長の渡會朋広先生（千歳市立緑小学校長）はじめ、大会運営委員会の皆様のご尽力に心より敬意と感謝を申し上げます。また、北海道教育委員会、千歳市並びに千歳市教育委員会をはじめ隣接の市町村教育委員会、千歳市小中学校校長会・教頭会、障害教育研究団体、親の会、多くの皆様の温かいご支援に対しまして心より感謝申し上げますと共に厚くお礼申し上げます。



祝辞

文部科学省初等中等教育局特別支援教育課
特別支援教育調査官 堀之内 恵司

第51回全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会全国大会、第55回北海道言語障害児教育研究大会が北海道千歳市において開催されますことをお喜び申し上げます。学校におかれましては、未だに続く新型コロナウイルスの感染予防とともに多くの行事や学習活動の変更を余儀なくされ、これまでと異なる対応を日々求められておりますが、子供たち一人一人が安心・安全な学校生活を日々送ることができますことは、各校の取組の賜物と考えております。また、貴研究協議会におかれましても、会員の皆様が平素から難聴・言語障害教育の充実のため、特別支援学級や通級指導教室における教育実践や各地域での研究会開催などを通して指導内容・方法の改善・充実に積極的に取り組み、成果を上げられていることに対して敬意を表します。さて、令和3年1月に中央教育審議会において『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』が取りまとめられました。現在、学校等においては、発達障害等のある子供に対する指導や支援に関する知見を集約・整理し、教師に還元することで、通級による指導を含む特別支援教育の充実を図り、子供の学びの質の向上につなげていく「一人も置き去りにしない教育」の実現が求められております。特別な支援を必要とする子供に対しては、一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった連続性のある多様な学びの場で適切な指導及び必要な支援が行われなければなりません。そのため、小・中学校等における難聴・言語障害教育に携わる担当者の役割も年々大きくなり、それに伴う担当者に期待される専門性が大変重要となっているところです。このような中、「ことばを支える『心の育ち』を大切にしたい支援のあり方を考える」の研究主題の下、関係の皆様が活発な協議を通して、難聴・言語障害教育に関する専門性を新しい時代に引き継いでいくことは、誠に意義深いものであります。オンデマンドによる映像配信といったICTを活用したオンラインでの開催ではありますが、参加された皆様が各自の専門性を一層高めるとともに、全国の仲間との情報交換を通して、多くの成果を収められることを心より期待しております。

結びに、本大会の開催準備に御尽力された皆様に御礼申し上げますとともに、全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会のますますの発展と、会員の皆様の御活躍を祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。



祝 辞

北海道教育委員会教育長 倉本博史

第51回全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会全国大会および第55回北海道言語障害児教育研究大会が、全国各地から難聴・言語障がい教育に携わる多くの関係者の御尽力により、千歳市におきまして盛大に開催されますことに心からお喜び申し上げます。

さて、国においては、令和4年3月、特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議報告を公表し、全ての教員が採用後、10年程度の間特別支援学級の担任などを2年以上経験することを目指すとした上で、担任としての配置が難しい場合でも特定の教科を通年で担当して経験を積むことが盛り込まれるなど、教師の特別支援教育に関する専門性が今後、更に求められる状況にあります。

難聴や言語障がいのある児童生徒の全国状況としては、難聴及び言語障がい特別支援学級に在籍する児童生徒数が10年前と比較して約1.2倍に、通級による指導を受けている児童生徒数も約1.2倍と、いずれも増加しています。

難聴や言語障がいのある子どもの教育の充実を図るためには、発音指導や言語指導等に関する専門性の維持・継承が不可欠であり、こうした状況の中、本道においては、これらの学級等を担当する教員の約4割が特別支援教育の経験が5年以内であるほか、特に、難聴特別支援学級などでは、校内はもとより市町村内の担当者が1名である場合が見られることや、コロナ禍で研修機会の確保が難しいことなどにより、担当者が孤軍奮闘している状況が散見しています。

北海道教育委員会としては、これまで集合形式で行ってきた「教育課程研究協議会」や特別支援学級の「授業公開」をオンラインで行うなど、広域な全道どこにいても研修に参加できるための取組をとおして、担当する教員の専門性の向上や維持・継承に取り組んできたところです。

これらの課題は、北海道に限ったことではなく、御参加の皆様には、各地域において、様々な取組や工夫を行いながら日々の授業を実践していただいていると承知しておりますが、コロナ禍においては、そういった取組を交流する機会が少ない状況も、同様に生じていると考えております。

このような中、本年度の研究大会は、「ことばを支える『心の育ち』を大切にした支援のあり方を考える」という研究主題のもと、幅広い内容の発表に対してコーディネーターの先生方の助言や講義を組み合わせた分科会のほか、広島大学の川合先生による記念講演を行うなど、多くの実践に触れるとともに、著名な専門家からの助言や講義を受ける機会として大変貴重なものと考えております。

御参加の皆様には、これらの講演や実践発表をとおして、講演テーマにもある「私たちができること」を見つけていただくとともに、その成果を校内の先生方とも共有しながら、難聴や言語障がいのある子どもを含む特別な支援を必要とする子どもたちの教育の充実につながるヒントを得られる機会となることを期待しております。

結びに、全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会および北海道言語障害児教育研究協議会の益々の発展と皆様の御健勝、御活躍を祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。



開催にあたって

千歳市長 山口 幸太郎

第51回全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会全国大会及び第55回北海道言語障害児教育研究大会千歳大会の開催をお慶び申し上げます。

今研究大会は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、オンラインによる開催となりましたが、ここ千歳市を中心として開催されますことを光榮に存じますとともに、教諭の皆様を始め関係者の皆様におかれましては、日頃より難聴・言語障がい児教育の充実と発展に御尽力されておりますことに深く敬意を表します。

現在、我が国はグローバル化や少子高齢化の進展、Society 5.0社会の到来などによる変革期にあり、教育分野においても、未来を担う子どもたちが、たくましく生きていくための資質や能力を身に付けるための教育環境を着実に整備していく必要があるものと考えております。

本市におきましては、令和3年度から、10年間のまちづくりの指針である「千歳市第7期総合計画」に基づく行政運営をスタートさせ、将来都市像を「人をつなぐ 世界をつなぐ 空のまちちとせ」と掲げ、まちの特徴である商業や農業、恵まれた自然など、“千歳らしさ”を生かしながら、各種施策や事業を効果的に展開することで市民の皆様が幸せを感じ“住んで良かった”と思えるまちづくりを推進しております。

特別支援教育の分野では、障がいのある児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援することを目的に、児童生徒一人ひとりの教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するための体制整備などに努めているところであり、本研究大会の実践的な研究成果が、地域の学校運営に資するものとなるよう期待しております。

ここ千歳市は、北海道の空の玄関口である新千歳空港があり、国立公園支笏湖などの雄大な自然に囲まれ、四季の移ろいを感じることができる住環境と、交通アクセスや生活利便性に優れた都市環境が調和するまちです。

支笏湖は、令和4年3月に全国で6番目となるゼロカーボンパークに登録され、美しい自然の中で温泉やキャンプ、カヌーなどを楽しみ、特産品の支笏湖チップ（ヒメマス）を味わうことができます。また、北海道らしい雄大なグリーンツーリズムエリアである市東部には、令和3年に世界遺産に登録された縄文時代後期の集団墓である「キウス周堤墓群」や、市中央部の「道の駅サーモンパーク千歳」に併設する「サケのふるさと千歳水族館」では、観察窓から千歳川の水中を観察することができ、秋には遡上するサケの姿を見ることができするなど、多くの見所がありますので、折を見て千歳市の魅力を御堪能いただければ幸いです。

結びに、本研究大会が皆様にとって実り多い大会となりますとともに、全国公立学校 難聴・言語障害教育研究協議会、北海道言語障害児教育研究協議会のますますの御発展と関係者皆様の御健勝を心から祈念申し上げます、お祝いの言葉とさせていただきます。

祝 辞



全日本聾教育研究会
会長 鹿嶋 浩

第 51 回全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会全国大会北海道大会、第 55 回北海道言語障害児教育研究大会千歳大会が、オンラインにより合同開催されますことを心よりお慶び申し上げます。本大会の開催にあたり全難言協鈴木聡会長、森實啓之副大会長、渡會朋広千歳大会運営委員長をはじめ、多くの関係各位のご尽力に改めて敬意を表します。

聴覚障害児教育は、新生児聴覚スクリーニングの普及、人工内耳や補聴器等の聴覚補償機器の進歩など、医療・保健体制の整備と科学技術の進歩を背景に変化の時を迎えています。また、音声変換など ICT 技術の進歩、手話に対する社会的関心の高まりなどにより聴覚障害児・者を取り巻く社会環境も多様化・複雑化しています。このような状況において重要になるのは、医療・保健・福祉・労働・教育等の多職種間の連携・協働です。

「ことばを支える『心の育ち』を大切にしたい支援のあり方を考える」の研究主題の下、児童生徒の健やかな成長・発達を願い、関係者で協議が行われますことは大変意義深く、専門性の向上において大きな役割を担っていると思います。今大会において、難聴・言語障害教育における専門性が再確認され、実践知として確実に蓄積・継承されますことを願っております。また、関係機関と連携・協働した取組においてその専門性が発揮され、切れ目ない支援体制の中で益々発展しますことを心より祈念しております。

私ども全日本聾教育研究会におきましては、10月6日・7日の二日間で第56回全日本聾教育研究大会愛知大会を開催いたします。この大会では、「聴覚障害教育の専門性の継承とさらなる発展—主体的・対話的で深い学びの授業を目指して—」と主題を設定し、多いに議論を重ねたいと考えております。

全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会と全日本聾教育研究会には、それぞれ異なる歴史と培われてきた専門性があります。一方で共通する専門性や課題も多く存在します。インクルーシブ教育の大きなうねりの中で、子どもたちの学びの場やニーズが多様化し、様々な専門性が求められています。このような状況だからこそ、連携・協働関係を一層深めていくことは時代の要請であり、従来の枠組みを超えた大きな教育成果が期待できると考えております。

最後になりますが、北海道大会・千歳大会が、参加された先生方、また全国の多くの会員の皆様にとりまして実り多き大会となりますことを心より祈念申し上げます。



心をつなぎ、ことばをつなぐ支援に向けて

第51回全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会全国大会
第55回北海道言語障害児教育研究大会

北海道千歳大会運営委員長 渡 會 朋 広
(千歳市立緑小学校長)

北海道は今、さわやかな季節を迎えています。国立公園「支笏湖」や清流「千歳川」を囲む自然に溢れた景色も夏から秋の装いへと移り変わり始め、過ごしやすい季節となりました。

『人をつなぐ 世界をつなぐ 空のまち ちとせ』は、北の玄関口「新千歳空港」を擁する交通の要衝として発展し、人口10万人を越えようという伸び盛りの平均年齢の若いまちです。また、世界文化遺産に登録された「キウス周提墓群」など貴重な文化遺産もあるなど、たいへん魅力あふれる都市づくりが進んでいます。

このような活みなぎる千歳の地で「第51回全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会全国大会北海道大会」(全難言協)並びに「第55回北海道言語障害児教育研究大会千歳大会」(道言協)を開催し、皆様をお迎えするところでした。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から、たいへん残念な思いではありますが、本大会を会同による実践交流や情報の共有からオンデマンド形式による開催とさせていただくことにしました。

本大会は、北海道言語障害児教育研究協議会(道言協)の研究主題「ことばを支える『心の育ち』を大切にしたい支援のあり方を考える」に基づき、下記にある4つの研究の柱に沿って進めていきます。

- 1 その子をどのようにとらえていくか。
- 2 その子にとっての問題をどのようにおさえ、問題の発生と経過をどうとらえるか。
- 3 その子にとっての必要な育ちとは何か。どのようにかかわり、支援するか。
- 4 支援の経過をどのように振り返り、関係する人々とどう情報共有するか。

全国では40,000人を超える児童生徒が難聴・言語障害通級指導教室で学んでおり、その人数は年々増加しています。千歳市においても今年度言語障害通級指導教室の設置校が新たに設けられ、さらにことばの教育相談は増えています。

そのような中、一人一人のきこえやことばへの想いや願いに応えるため、より支援する教員の専門性や指導力は大切になっています。そして、よりよい支援によって心の成長が促されることは、コミュニケーションへの意欲を高め、生きる力を高めていくものと思います。そのためにも本大会が参加される多くの皆様にとって、意義のあるものとなりますよう大会運営に全力を尽くして参りたいと思います。

本大会の開催にあたり、北海道教育委員会、石狩教育局、千歳市並びに関係諸機関には多大なご支援を賜りましたことに心よりお礼申し上げます。また、提言や大会準備・運営にご尽力頂きました大会運営に関わる皆様へ感謝申し上げます。